

訪日中国人の年齢構成に対する 中国の少子高齢化の影響

もりた かねきよ
森田 金清 和歌山大学大学院観光学研究科博士後期課程

The purpose of this research is to investigate the impact of China's low birthrate and aging population on the age structure of Chinese visiting Japan. In this study, we take the changes in the age structure of Chinese visiting Japan from 2006 to 2017 as objective variables, and set factors that may affect the changes in age structure as explanatory variables, and then use correlation coefficients and multiple regression analysis to determine Examined the correlation between the two. The results of the investigation show that the factors affecting the proportions of the various age groups of Chinese visiting Japan are as follows: In the "40 to 44" age group, it is "the proportion of the population over 65 in the total population". In the "55 to 59" age group is the "child dependency ratio". The two age groups "60 to 64" and "65 to 69" are the "elderly dependency ratio". In the "70 years and older" age group, it is "the proportion of the population over the age of 65 to the total population". As a result, this study has reached the conclusion that the age structure of Chinese visiting Japan will be tilted towards the elderly to a certain extent.

キーワード：訪日中国人 年齢構成 高齢者観光

Keyword : Chinese visiting Japan, age structure, elderly tourism

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

(1) 本研究の背景

60歳以上の年齢層別訪日中国人の推移について、訪日外国人全体と比較すると、一貫して低い比率に止まっているという傾向が見られる。

図-1は、2006年～2016年の訪日外国人・中国人について、60～64歳、65～69歳、70歳以上という3つ目の年齢層の比較を示している。訪日中国人は、60～64歳が2015年に訪日外国人の平均と同率であった以外、一貫して訪日外国人を下回ってきたが、2006年に比べると、2016年には、60～64歳では1.9%から3.9%へ、65～69歳では1.2%から1.9%へ、70歳以上では1.2%から1.4%へと高くなっている。訪日外国人全体では、60～64歳では4.0%から4.7%へ、65～69歳では2.8%から2.9%へと高くなった一方、70歳以上では3.0%から2.6%へ下がった。

図-2は、2006年～2016年における訪日

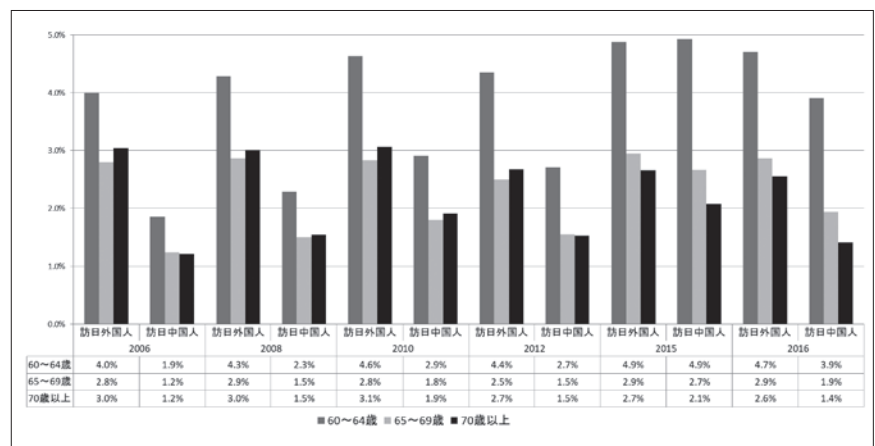


図-1 2006年～2016年の訪日外国人・中国人の年齢層の推移（60歳以上）

出典：法務省「出入国管理統計表」に基づき、筆者が編集。

中国人の年齢層別比率の推移を7つの年齢層に分けて、示している。「40～44歳」は、唯一2016年が2006年に比べ、比率が下がった年齢層であった。「45～49歳」は、2010年の10%を最高に下げに転じ、2016年には2006年の水準に逆戻りした。「50～54歳」は、緩やかな上昇であった。「55～59歳」より上の年齢層は、増加幅が大き

かった。特に以降の、「60～64歳」と「65～69歳」は、2016年が2006年に比べ、倍増または倍増に近い増加であった。

(2) 研究課題と目的

観光客を中心に、訪日中国人が持続的に増えている。筆者が注目したのは、その年齢構成の推移に見られる2つの傾向

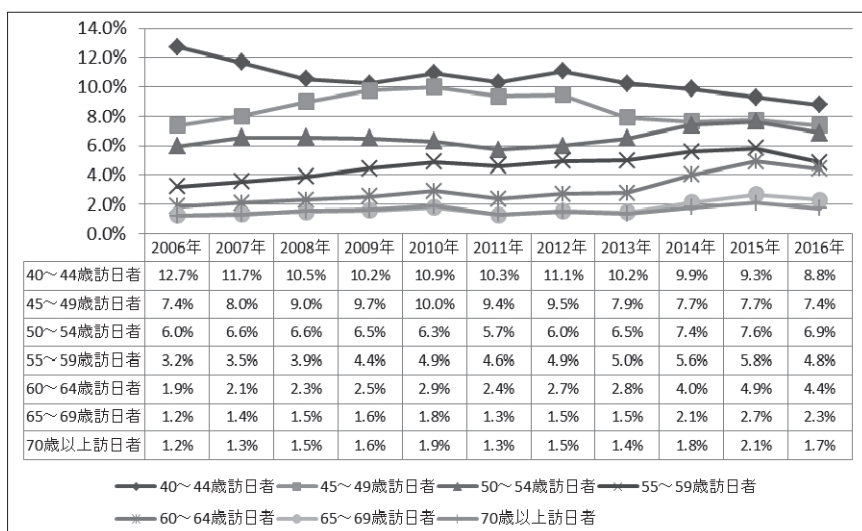


図-2 2006年～2016年における訪日中国人の年齢層別比率の推移

出典：法務省「出入国管理統計表」に基づき、筆者が編集。

である。まず図-2が示す(2006年～2016年の11年間平均値)ように、訪日中国人は、60～64歳、65～69歳、70歳以上という3つの年齢層では、訪日外国人全体に比べて、すべて低い比率となっている。一方、この3つの年齢層の比率が長期的に増加する傾向が見られる。2つ目の傾向が続けば、1つ目の傾向に変化をもたらすのか。また、中国における少子高齢化の進行が2つ目の傾向の継続につながるのか、という疑問がある。中国の少子高齢化がさらに進行し、少子高齢化が訪日中国人の年齢構成の変化と関係があるとするれば、今後訪日中国人の年齢構成での高齢化が考えられ、そのための対応が観光業界の課題となる。本研究はこのような考えを踏まえて、訪日中国人の年齢構成に対する中国の少子高齢化の影響を考察することを目的とする。

1-2 先行研究レビュー

(1) 少子高齢化の進行に伴う諸問題

先行研究では、中国における少子高齢化の進行が報告されている。

中国民政部の《老年人社会福利機構基本規範》(2001.2)では、高齢者について「老年人(高齢者)」を60歳以上の人と定義・分類している。また、総人口に占める65歳以上の人口の割合が老年化指数と呼ばれる。2001年ごろに、中国の総人口

における65歳以上人口の割合が7%を超え、中国は日本や韓国に続き人口高齢化社会に入った(王桂新・戴二彪、2015)。また、65歳以上高齢人口は、2012年には1.27億人へ増大し、2016年には、さらに65歳以上人口の割合が10.8%に達して、高齢化が一段と進行している(中国国家統計局、2018)。

少子高齢化がもたらす問題において、年金問題や扶養構造の問題が指摘されている。中国の人口構成バランスは崩れ始め、2人の若い夫婦は親4人の老後の面倒を見るという構図になりつつある(方蘇春・富川拓ほか、2011)。

現段階で農村と都市部の低所得者層、都市部の勤労者層、政府の公務員という三つの階層別に分けて対応する年金制度が敷かれているが、市場経済化改革がまた発展途上にある等の現状からすると、優遇される公務員を別として、一般市民に適用される年金制度を安定的・持続的に維持することは困難である(李森、2015)。

中国における伝統的な高齢者の扶養は、①主として子女に託されるが、若干本人の労働や配偶者に頼る農村老人、②「退休金」を受け経済的に自立するが、生活の面倒は家庭内扶養に頼る都市部の職員・労働者であった老人、③親戚や友人及び政府によって社会的救済されるより

他に寄りどころのない老人、という3つの対応に大別することができる。急速な高齢化の進行により、老人扶養危機と急増する年金費用が大きな社会問題と経済問題として浮上している(王逸飛、2013)。中国では、農村地域の社会インフラ整備が出遅れ、年金や医療などの社会保障制度が整えられていないために、高齢者は子どもの扶養に頼らざるを得ないという実態がある(金光洙、2016)。

以上を踏まえて高齢者の扶養については、年金制度の恩恵を受けにくい農村住民と比較的優遇される都市住民との違いがある。一方、今後高齢化の深刻化により年金制度の維持が難しくなり、家族の扶養への依存が高まる可能性がある。経済的に自立できない高齢者の増加は、15歳～59歳の若年及び中年者の負担増につながり、海外旅行をする経済的余裕が減る状況を招くことも予想される。

(2) 中国における観光需要の動向

人数と消費額において、中国はすでに世界最大規模の海外旅行市場となっており、2020年には1億6千万人に達し、2020年には消費額が2,030億人民元を超えることが予想される(Alex Dichter・Chen Jinほか、2018)。

観光需要の予測に関しては、いままでも旅行会社や観光機関が主に過去の実績や経験則に基づいて個別に実施してきたが、年齢、性別、居住地といった観光客の属性別の違いが十分に考慮されておらず、また予測の精度も、急に発生する流行病や自然災害などの変動要因によって低減されるという問題がある(山本真嗣、2017)。

可処分所得が先進国に劣るため、中国人は海外観光目的地の選択にあたり、旅行支出をできる限り抑えようとしている。中国最大のオンライン旅行予約サイト「Ctrip」において、2017年10月に設定される海外への団体観光コースの費用に関しては、米国(ニューヨーク、ワシントン、ボストンなど)コースが6泊10404元、欧州(パリ、ミラン、ローマなど)

コースが7泊19800元であるのに対し、日本(東京、京都、大阪など)は、5泊4388円で、普通の中国人にも受け入れやすいコストであり、割安感が目立つ(中国旅游研究院、2018)。その上、距離的に近いこと、同じ時差であること、同じ漢字圏に属する親近感など、日本観光ブームを今後も持続させる、様々な積極要因があるとしている(張国峰、2018)。

ビザ発給要件の緩和などにより、訪日観光客の団体離れが生じ、また従来の富裕層による個人旅行に加えて、低所得層の個人旅行も増えるとの展望が旅行会社から示されている(黄・石橋ほか、2017)。

社会の進展と所得の上昇に伴い、社会保障制度のさらなる改善により、多くの高齢者は従来の「高蓄積、軽消費」の価値観から離れ始め、生活の質を追求する新しい消費価値観へ変わりつつある。これにより海外旅行者がますます増加している(金光洙、2016)。

以上の先行研究を踏まえれば、今後も中国人の観光需要が増えていくことが予想されよう。

(3) 長距離観光及び海外旅行における年齢構成の特徴

観光サイト「驢媽媽旅游网」の発表によると、長距離移動を伴う中国国内観光を行う主力は、23～37歳の年齢層であり、そのうち、23～32歳の観光客は45%を占め、33～37歳の観光客は33%を占めており、両者の合計は78%に達して、他の年齢層を圧倒している(驢媽媽旅游网、2018)。また、Ctrip社の予約統計では、カップルが39%、三人・四人グループの合計が40%に達しており、恋人同士や親子を中心とする家族旅行が長距離移動を伴う中国国内観光の主要形態である(中国旅游研究院、2018)。

2017年に、ヨーロッパを訪問した中国人は600万人を超えているが、主力は、30～40歳の年齢層である。この年齢層の人々は、収入及び消費能力が比較的高く、家族旅行タイプの観光が多いので、良質なサービスや快適さ体験に対するニーズ

が高い(中国旅游研究院、2018)。

海外旅行に出かける中国人観光客の年齢は、他の国に比べて若い。例えば、米国への中国人観光客の平均年齢は35歳で、調査対象となった40カ国以上の平均よりも低い。英国では、中国人観光客の半数以上が16歳から34歳の間であり、日本と韓国を訪れる中国人観光客のうち、63%と70%はそれぞれ40歳未満である(Alex Dichter・Chen Jinほか、2018)。

以上を踏まえて、中国人の観光における年齢構成の特徴として、中国国内の長距離観光では、23歳～37歳が全体の8割弱を占めるが、海外旅行においても他の国に比べて年齢層が若いことがわかった。

(4) 高齢者観光の特徴

Babou (2005) は、シニア観光市場について年齢別に50～59歳でまだ働いている、より良い「マスター」層、60～74歳は時間とお金の両方から「解放された」層、75歳以上は低所得と健康制限ありの「撤退」層に分けられるとしている。

Eunjuら(2014)は、観光に対する高齢者のモチベーションが余暇生活領域の満足度にプラスの影響があり、余暇生活領域への満足度はまた、高齢者の全体的な生活満足度につながるとの調査結果を踏まえ、観光は高齢者の生活の質を向上させる手段になりうると指摘している。

Elisaら(2016)は、高齢者人口の比較的高い購買力が多くの産業に市場性を示唆しているが、観光セクターが最大の受益者の1つとして浮上しているとしている。

中国高齢者の海外旅行について、渡航先として東南アジア及び韓国など近隣諸国を選ぶ場合が多く、自己資金や子供の援助に加えて、労働組合および高齢化団体の出費による場合もあるなど資金源の多様性が見られ、3～6月及び9～11月のオフシーズンを選ぶ高齢者が多い、などの特徴が指摘されている(智研諮詢集団、2018)。

中高年(45歳以上の中年者と高年者)

観光客の中で、月収5000元以上の中高年観光客の割合は57.8%を占め、そのうち月収7000元を超える高所得者は31.3%を占めた(智研諮詢集団、2018)。

高齢者の87%が旅行意欲を持ち、60歳以上の7割が8日間以上の中長期観光を年2回以上行っており、年3回以上の高齢者も2割に達している(中投顧問、2016)。

高齢者旅行市場には、①旅行への意欲は強い。②旅行時間の設定はもっと柔軟にできる。③観光需要はより多様化している。④コスト・パフォーマンス及びサービス品質を重視。⑤団体旅行を好む、といった特徴が指摘されている(胡祖全、2016)。

日本の少子高齢化は、国内観光客数の減少要因になるとの分析があるが(李良姫、2016)、少子高齢化と海外旅行者数の変化との関係に関する研究は確認できなかった。

以上を踏まえて、世界的に見て、高齢者観光は今後も拡大する可能性を潜んでいる。中国人高齢者の観光において、旅行意欲が高く、オフシーズンを選好し、資金源に多様性があるといった特徴が見られることがわかった。

1-3 問題意識及び研究方法

先行研究では、海外旅行における年齢構成の特徴として、若い年齢層が他国に比べて多いことは、前述の訪日中国人の実態と一致する。また、若年及び中年者の海外旅行に関しては、少子高齢化の進行に伴う年金問題や扶養構造の問題による負担増及び総人口に占める比率の低下が、海外旅行の影響要因になり得る。高齢者観光については、拡大する可能性が示された。一方、先行研究では、訪日中国人の年齢構成がどのように推移してきたか、その推移は、中国の少子高齢化の進行とどのような関係を有するかについての考察は、十分なされていない。

(1) 仮説

前述の問題意識に基づき、本研究は次

の3つの仮説を立て、訪日中国人の年齢構成に対する中国の少子高齢化の影響について検証を行う。

仮説1：総人口に占める比率の低下により、40～49歳の年齢層の訪日者が占めるシェアは、低下する可能性がある。

仮説2：総人口に占める比率の上昇により、50～59歳の年齢層の訪日者のシェアが拡大する可能性が考えられる。

仮説3：「65歳以上人口比率」及び「高齢者扶養比率」の上昇により、60歳を超える高齢者層の訪日者のシェアがさらに高くなる可能性がある。

本研究は、2006年～2016年における訪日中国人の年齢構成の推移を目的変数に設定し、その推移に影響を及ぼすと思われる要素を説明変数に設定し、相関係数と重回帰分析により、両者の相関関係を明らかにする。

目的変数は、以下の年齢層別の訪日者比率である。①40～44歳 (a1)、②45～49歳 (a2)、③50～54歳 (a3)、④55～59歳 (a4)、⑤60～64歳 (a5)、⑥65～69歳 (a6)、⑦70歳以上 (a7)。40歳からの年齢層比率を目的変数に設定するのは、この年齢層からは、子供の養育に加え、高齢者の親を支援する経済的負担を強いられる可能性があるからである。中国の定年（公的年金制度における年金支給開始年齢）は、性別・職種別で異なり、原則として男性は60歳、女性は幹部が55歳、ワーカー（現場労働者）が50歳となっている（加藤2016：66～67）。年金は、現役時代の収入に比べて、半分以下に激減するのが一般的である（張・杉澤 2015：97～98）。

説明変数は、以下の6つの項目である。①0歳～14歳人口比率 (pr1)、②15歳～64歳人口比率 (pr2)、③65歳以上人口比率 (pr3)、④総扶養比率 (tdr) ⁽¹⁾、⑤子供扶養比率 (cdr) ⁽²⁾、⑥高齢者扶養比率 (edr) ⁽³⁾、⑦人民元レート (rmr)

①～③は、少子高齢化の傾向を示す指標である。④～⑤は、少子高齢化の進行

による影響を示す指標である。⑦は、訪日旅行の費用に影響を与える要素である。

(2) 重回帰分析の推計式

推計式 $\log(\text{OTP}) = a + \sum \text{pr}1 + \sum \text{pr}2 + \sum \text{pr}3 + \sum \text{tdr} + \sum \text{cdr} + \sum \text{edr} + \sum \text{rmr} + c$
 a は定数項、 c は誤差項。

OTP（目的変数）= a1、a2、a3、a4、a5、a6、a7

説明変数：pr1 = 1, …… , 11

pr2 = 1, …… , 11 pr3 = 1, …… , 11

tdr = 1, …… , 11 cdr = 1, …… , 11

edr = 1, …… , 11 rmr = 1, …… , 11

(3) 分析手法

1) 相関分析

目的変数と説明変数の相関分析を行い、どの説明変数とも有意な相関係数が得られなかった目的変数については、重回帰分析には投入しない。

2) 重回帰分析

統計解析ソフトSPSS Statistics Ver.25を使用し、目的変数と説明変数との因果関係を明らかにする。最適の変数を選択するために、ステップワイズ法⁽⁴⁾を採用する。多重共線性を回避するために共線性の診断を行い、選択された変数（モデル）のVIF値が10を超えた場合⁽⁵⁾、相関係数が高い2つの変数のうち、1つを外して再投入する。

2. 調査の結果

(1) 中国における人口動向及び扶養率の推移

図3は、2006年～2016年の中国における総扶養比率、子供扶養比率及び高齢者扶養比率の変化を示している。高齢者扶養比率が上昇を続けてきたのに対し、子供扶養比率は、2006年の27.3%から2011年の22.1%に下がった後、わずかな上昇を続けてきた。この2つの指標の合計となる総扶養比率、2006年の38.3%から2011年の34.2%に下がった後、上昇を続け2016年には2007年と同水準の37.9%に逆戻りした。

(2) 訪日中国人の年齢層別比率の変化要因に関する相関係数分析

表1は、訪日中国人の年齢層別比率の変化要因に関する相関係数を示している。「40～44歳」に関しては、0歳～14歳人口比率と子供扶養比率との相関係数及び65歳以上人口比率と高齢者扶養比率との負の相関係数は有意であったが、他の項目との相関係数に有意性が見られなかった。「45～49歳」に関しては、15歳～64歳人口比率と人民元レートとの相関係数及び総扶養比率との負の相関係数は有意であったが、他の項目との相関係数に有意性が見られなかった。「50～54歳」に関しては、高齢者扶養比率との相関係数及び人民元レートとの負の相関係数

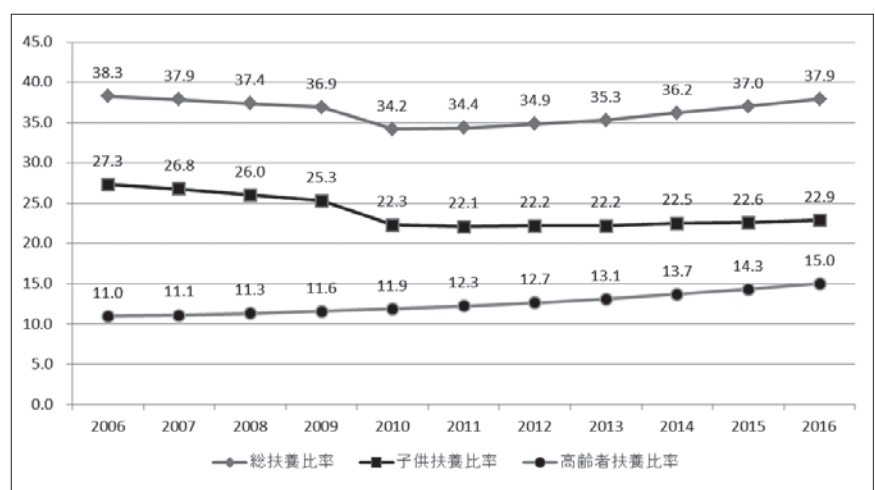


図-3 中国における扶養比率の変化 (%)

出典：中国国家统计局のデータに基づき、筆者が編集。

は、有意であったが、他の項目との相関係数に有意性が見られなかった。「55～59歳」に関しては、65歳以上人口比率と高齢者扶養比率との相関係数、0歳～14歳人口比率及び子供扶養比率との負の相関係数は有意であったが、他の項目との相関係数に有意性が見られなかった。「60～64歳」に関しては、65歳以上人口比率と高齢者扶養比率との相関係数、0歳～14歳人口比率及び人民元レートとの負の相関係数は有意であったが、他の項目との相関係数に有意性が見られなかった。「65～69歳」に関しては、65歳以上人口比率と高齢者扶養比率との相関係数及び人民元レートとの負の相関係数有意であったが、他の項目との相関係数に有意性が見られなかった。「70歳以上」に関しては、65歳以上人口比率と高齢者扶養比率との相関係数は有意であったが、他の項目との相関係数に有意性が見られなかった。

（3）訪日中国人の年齢層別比率の変化要因に関する重回帰分析

表2は、訪日中国人の年齢層別比率の変化要因に関する重回帰分析の結果である。

「40～44歳」に関しては、「65歳以上人口比率」が、目的変数を説明する予測率が高い説明変数のモデルとして残った。調整済みR2乗が0.673になり、この年齢層の訪日者比率の変動を約67%説明できることが分かった。また標準化係数は、-0.839で、大きなマイナス影響を有することが窺える。非標準化係数Bが-0.925であるが、「65歳以上人口比率」が1%増えるとこの年齢層の訪日者比率を0.925%下げる効果が予測される。

「45～49歳」に関しては「人民元レート」が、目的変数を説明する予測率が高い説明変数のモデルとして残った。調整済みR2乗が0.616になり、この年齢層の訪日者比率の変動を約62%説明できることが分かった。また、標準化係数は、0.809で、大きな影響を有することが窺える。非標準化係数Bが0.009であるが、「人民

表-1 年齢層別訪日中国人の人数変化要因に関する相関係数

訪日中国人年齢層	0歳～14歳人口比率	15歳～64歳人口比率	65歳以上人口比率	総扶養比率	子供扶養比率	高齢者扶養比率	人民元レート
40～44歳	.658*	-.098	-.839**	.101	.621*	-.830**	.421
45～49歳	-.119	.633*	-.352	-.648*	-.188	-.424	.809**
50～54歳	-.207	-.369	.592	.369	-.138	.603*	-.901**
55～59歳	-.897**	.489	.851**	-.487	-.873**	.794**	-.328
60～64歳	-.633*	-.043	.918**	.050	-.573	.922**	-.672*
65～69歳	-.513	-.120	.815**	.126	-.453	.820**	-.692*
70歳以上	-.541	.142	.638*	-.142	-.506	.606*	-.443

*. 相関係数は5%水準で有意（両側）。

** . 相関係数は1%水準で有意（両側）。

表-2 訪日中国人の年齢層別比率の変化要因に関する重回帰分析

訪日中国人年齢層	選択されたモデル	決定係数	調整済み決定係数	F値の有意確率	標準化されていない係数		標準化係数	t値	t値の有意確率	
					B	標準誤差				
40歳～44歳	(定数)	.707	.673	.001a	.190	.018		10.294	.000	
	中国における65歳以上人口比率				-.925	.200	-.839	-4.631	.001	
45歳～49歳	(定数)	.654	.616	.001a	.026	.015		1.755	.113	
	人民元レート				.009	.002	.809	4.126	.003	
50歳～54歳	(定数)	.811	.790	.001a	.104	.006		16.709	.000	
	人民元レート				-.006	.001	-.901	-6.214	.000	
55歳～59歳	(定数)	.900	.877	.000*	-.349	.044		-.891	-7.958	.000
	中国における子供扶養比率				-.003	.001	-.373	-3.327	.010	
60歳～64歳	(定数)	.851	.834	.001a	-.055	.012		-.4619	.001	
	中国における高齢者扶養比率				.678	.095	.922	7.159	.000	
65歳～69歳	(定数)	.672	.636	.002*	-.018	.008		-2.200	.055	
	中国における高齢者扶養比率				.282	.066	.820	4.294	.002	
70歳以上	(定数)	.407	.341	.002*	-.001	.007		-.148	.886	
	中国における65歳以上人口比率				.182	.073	.638	2.487	.035	

*. 相関係数は5%水準で有意（両側）。

** . 相関係数は1%水準で有意（両側）。

元レート」が1元の元高円安で増えるこの年齢層の訪日者比率を0.01%ほど上げる効果が予測される。

「50～54歳」に関しても、「人民元レート」が目的変数を説明する予測率が高い説明変数のモデルとして残った。調整済みR2乗が0.790になり、この年齢層の訪日者比率の変動を約79%説明できることが分かった。また、標準化係数は、-0.901で、大きなマイナス影響を有することが窺える。非標準化係数Bが-0.006であるが、「人民元レート」が1元の元高円安で増えるとこの年齢層の訪日者比率を0.006%ほど下げる効果が予測される。

「55～59歳」に関しては、残った説明変数のモデルに「子供扶養比率」と「人民元レート」の2つの変数が有意であった。調整済みR2乗が0.877になり、2つの変数でこの年齢層の訪日者比率の変動を約88%説明できることが分かった。ま

た標準化係数は、「子供扶養比率」が-0.373で、「人民元レート」に比べてマイナス影響がやや大きいことが窺える。非標準化係数Bでは、両変数とも-0.003であるが、子供扶養比率が1%上昇すると、また「人民元レート」が1元の元高円安であると、この年齢層の訪日者比率を0.003%ほど、下げる効果が予測される。

「60～64歳」に関しては、残った説明変数のモデルに「高齢者扶養比率」が、有意であった。調整済みR2乗が0.834になり、この年齢層の訪日者比率の変動を約83%説明できることが分かった。また、標準化係数は、0.922で、大きな影響を有することが窺える。非標準化係数Bが0.678であるが、「高齢者扶養比率」が1%上昇すると、この年齢層の訪日者比率を0.68%ほど上げる効果が予測される。

「65～69歳」に関しても、残った説明変

数のモデルに「高齢者扶養比率」が有意であった。調整済みR2乗が0.636になり、この年齢層の訪日者比率の変動を約63.6%説明できることが分かった。また、標準化係数は、0.820で、大きな影響を有することが窺える。非標準化係数Bが0.282であるが、「高齢者扶養比率」が1%上昇すると、この年齢層の訪日者比率を0.28%ほど上げる効果が予測される。

「70歳以上」に関しては、残った説明変数のモデルに「65歳以上人口比率」が、有意であった。調整済みR2乗が0.341になり、この年齢層の訪日者比率の変動を約34%説明できることが分かった。また、標準化係数は、0.638で、一定の影響を有することが窺える。非標準化係数Bが0.182であるが、「65歳以上人口比率」が1%上昇すると、この年齢層の訪日者比率を0.18%ほど上げる効果が予測される。

3. 考察

(1) 人口動向及び訪日中国人の年齢構成

中国国家统计局の統計に示した動向から、少子高齢化の進行が確認されたと言える。0歳～14歳の未成年層と15歳～64歳の生産年齢人口層が明確な減少傾向を示した一方、65歳以上の高齢者層のシェアが大きくなり続けている。それを反映して、生産年齢人口層の経済的負担を意味する高齢者扶養比率が長期的な上昇を続けてきた。

訪日中国人の年齢構成に関しては、先行研究で述べられた、「海外旅行に出かける中国人観光客の年齢は、他の国に比べて若い」という傾向は、中国人の年齢層が11年間平均値で見た外国人全体の年齢層構成と比較した場合でも裏付けられた。

訪日中国人の人数が、2006年の98万人から2016年の517万人に増えており、すべての年齢層において大幅な増加であったが、そうした中、特に高齢者のシェアが拡大し続けてきた。60～64歳、65～69歳、70歳以上という3つの高齢者層については、全体を占める比率は外国人に比べて

低い、長期的な上昇傾向が見られている。特に2015年の比率は、60～64歳では外国人の平均と同率で、65～69歳では2006年の1.6%差から0.2%差に縮まっている。

(2) 少子高齢化の影響

中国の少子高齢化が訪日中国人の年齢構成に与える影響要因については、「65歳以上人口比率」、「子供扶養比率」及び「高齢者扶養比率」の三項目が明確に確認された。一方、その影響要因は、すべての年齢層に同様に作用したのではない。

「65歳以上人口比率」の増加に起因している変化は、訪日中国人における「40～44歳」の年齢層のシェアが下降傾向にあることと、「70歳以上」の年齢層のシェアが上昇傾向にあることに反映されている。高齢者人口の比率が長期的な上昇傾向であることは、相対的に訪日中国人の高齢化にもつながり、「40～44歳」の年齢層のシェア低下及び「70歳以上」の年齢層のシェア拡大を招いているからであろう。

訪日中国人における「55～59歳」の年齢層に関しては、「子供扶養比率」との負の因果関係が裏付けられた。この年齢層だと、子供を扶養する段階を超えているが、子供が結婚や子育ての時期を迎える段階なので、親が多額の援助をする慣習があるために、間接的に孫の扶養に手を貸しているからであろう。

「高齢者扶養比率」の上昇が、「60～64歳」と「65～69歳」の2つの年齢層のシェア上昇に寄与していることがわかった。「高齢者扶養比率」の上昇は、高齢者人口が増加した結果でもあるので、相対的に訪日中国人の高齢化加速にもつながったと思われる。また、60歳以上になれば、ほとんどの中国人が定年を迎える年齢にあたり、時間的に余裕があり、割安なオフシーズンの利用も可能なので、他の年齢層よりも出かけやすい環境に恵まれると言えよう。

4. 結論

以上の検証を踏まえて、本研究の仮説について、以下の結論を述べる。

「65歳以上人口比率」という高齢化の進行を示す指標が40～44歳の年齢層が占める訪日者のシェアを下げる効果が裏付けられたが、45～49歳の年齢層については、影響は確認できなかった。これを踏まえて、仮説1は部分的に成立したと言えよう。

子供扶養比率の低下は55～59歳の年齢層の訪日者シェア拡大につながる可能性が裏付けられたが、50～54歳の年齢層についての影響は不明であったので、仮説2は部分的に成立したことになる。

「高齢者扶養比率」の上昇が60歳～69歳の年齢層、「65歳以上人口比率」の上昇が70歳を超える高齢者層に関して、それぞれの訪日者シェアの拡大につながる可能性を裏付けたので、仮説3が成立したと言える。

本研究では、訪日中国人の年齢構成への中国の少子高齢化の影響については分析できた。しかし、少子高齢化による税負担の増加や、経済成長率の鈍化などまだ検討しなければいけない要因がある。今後も引き続きその要因を研究していきたい。

注記

(1) 0歳～14歳人口・65歳以上人口と15歳～64歳人口の比率

(2) 0歳～14歳人口と15歳～64歳人口の比率

(3) 65歳以上人口と15歳～64歳人口の比率

(4) 統計的に最も予測率が高いと考えられる変数から順に自動的に投入される方法で、説明変数が多い場合に適する。(石村・石村、2011)

(5) 説明変数間での相関が高いことを意味する多重共線性が存在し、正しい回帰分析が出来なくなる。(石村・石村、2011)

参考文献

〔日本語文献〕

- ・石村貞夫・石村友二郎 (2011) 「SPSS による多変量データ解析の手順」『東京図書』、8～17ページ
- ・王桂新・戴二彪 (2015) 「中国における少子の実態、発生要因と対策」『AGI Working Papers Series』2015、1-22ページ
- ・王逸飛 (2013) 「高齢化社会における中国公的年金制度の課題」『人間社会環境研究』(25)、25-40ページ
- ・加藤康二 (2016) 「世界のビジネス潮流を読む エリアレポート 中国 公的年金の備えは万全か」『ジェットロセンサー』66 (792)、66～67ページ
- ・金光洙 (2016) 「中国の高齢化の要因と経済的影響」『現代社会文化研究』(62)、181-196ページ
- ・黄愛珍・石橋太郎・狩野美知子・太田隆之・大脇史恵 (2017) 「訪日観光客に注目したヒアリング調査報告」『静岡大学経済研究』22 (1)、19-39ページ
- ・国土交通省 (2018) 『平成30年版観光白書』、9ページ
- ・塩谷英夫 (2014) 「2030年の観光地経営、人口減・高齢化市場の対応に必要な3つの取組みとは？」『JTBフ旅行動向シンポジウム：レポート』
<https://www.travelvoice.jp/20140115-14203> 閲覧日：2020年9月9日
- ・張星眸・杉澤秀博 (2015) 「中国の一人っ子世代における老親扶養に関連する要因」『老年学雑誌』5、91-100ページ
- ・張国峰 (2018) 「訪日中国人観光客による爆買いに関する一考察」『東アジア評論』(10)、105-117ページ
- ・方蘇春・富川拓・野本茂・塚本五二郎 (2011) 「中国における高齢者福祉の現状に関する一考察」『聖泉論叢』(18)、15-23ページ
- ・法務省「出入国管理統計統計表(年報)」
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_nyukan.html 閲覧日：2020年9月9日

- ・山本真嗣 (2017) 「温泉地における訪問者属性の比較論的考察」『名古屋学院大学論集社会科学篇』53 (4)、163-170ページ
- ・李森 (2015) 「年金数理モデルによる中国の年金制度の分析 (桑原哲也教授追悼号)」『福山大学経済学論集』39 (1・2)、107-120ページ
- ・李良姫 (2016) 「人口減少と高齢化による観光への影響：国および地域の取るべき政策」『日本地域政策研究』16、4-11ページ

〔外国語文献〕

- ・Alex Dichter, Chen Jin, Steve Saxon, Yu Zijian, Suo Peimin (2018) 「迷思と真相：中国出境観光市場深度観察」麦肯錫公司、4
- ・中国国家统计局 (2018) 『中国統計年鑑』
<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/> 閲覧日：2020年6月5日
- ・胡祖全 (2016) 「中国の高齢者観光の発展のための問題と対策」国家信息中心
<http://www.sic.gov.cn/News/459/7213.htm> 閲覧日：2020年6月5日
- ・驢媽媽旅游网 (2018) 「2017国内長線消費報告：80後、90後は消費担当」
<http://travel.people.com.cn/n1/2018/0125/c41570-29786045.html> 閲覧日：2020年6月5日
- ・中国旅游研究院・Ctrip Group (2018) 「2017年中国—ヨーロッパ観光市場データレポート」Ctrip Group、
<http://www.ctaweb.org/html/2018-1/2018-1-18-15-30-00840.html> 閲覧日：2020年6月5日
- ・智研諮詢集团 (2018) 「2017年中欧旅游市場数掘報告」『中国産業信息网』
<https://www.chyxx.com/research/201803/617496.html#catalogue> 閲覧日：2020年9月9日
- ・中投顧問産業中心 (2016) 「2016-2020年中国老年旅游市場深度調研及開發戰略研究報告」
www.ocn.com.cn/2019/2/1 閲覧日：2020年9月9日
- ・Babou, I. (2005), The market for

- ‘seniors’. Let’s not kill the hen that lays golden eggs, *Espaces, Tourisme & Loisirs*, No.222, pp. 17-20
- ・Eunju, Woo., Hyelin, Kim., Muzaffer, Uysal. (2014) A Measure of Quality of Life in Elderly Tourists, *pringer Science + Business Media Dordrecht and The International Society for Quality-of-Life Studies, (ISQOLS)* 2014
- ・Received: 31 July 2014 /Accepted: 18 August 2014
- ・Elisa, Ale'n, Nieves., Losada, Trinidad, Domínguez. (2016) The Impact of Ageing on the Tourism Industry: An Approach to the Senior Tourist Profile, *Soc Indic Res*, Vol.127, pp. 303-322. DOI 10.1007/s11205-015-0966-x

【本稿は所定の査読制度による審査を経たものである。】